

私立総合大学教員養成課程における マイクロティーチングの導入

三尾 忠男・牧野 智和

キーワード：教師教育、授業スキル、マイクロ・ティーチング、協調学習、自己評価、教職大学院

【要 旨】多様な学校現場の課題に対応するため、文部科学省による推進プログラム事業が進められている。教員養成段階については、学部教職課程に「教育実践演習」の導入など質保証の仕組みが図られようとしている。本報告は、大規模な私立総合大学の開放制教員養成の中で学生のマイクロ・ティーチングの導入を試みた経緯とその経過を報告するものである。さらに、2008年度開設の教職大学院の科目にも導入しており、学部教職課程での受講者との自己評価の傾向を報告する。

1. はじめに

学校現場が抱える複雑・多様化した今日的課題に対応できる教員養成に、私立総合大学の開放制教員養成の中でどのように取り組めるかについて、早稲田大学では教育・総合科学学術院を中心に「教育臨床を重視した教員養成強化プログラム」（以下、「教育臨床GP」と略）を立案し、文部科学省から「大学・大学院における資質の高い教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に採択され（2005・2006年度）、新しい教員養成強化の各種プログラムを試行してきた。その中で、授業スキルの向上を目的としたマイクロ・ティーチングを取り入れた科目を開発し、正規科目として運用を開始した。

2. 課題

本学の教職課程には、4522名の登録者がおり、1120名が教育実習科目に登録している（2008年5月）。2007年度教員免許取得者数は832名で、同年度教員就職者数は118名である。卒業直後に教職に就く学生は、教員免許取得学生の14%であった。このように教職課程科目の受講生が非常に多い本学において、教職課程各科目のクラスサイズの適正化に取り組んでいるが、決して十分とはいえない。また、教育実習前に教育実習生として必要な指導内容を検討するため、著者は、自身の担当する教職科目において、「教育実習生に求められる資質・能力に関するアンケート」（山川1987）を実施した。

実習前学生として2006年度教職課程科目「教育方法研究」（ $n=105$ ）、実習後学生として同「教育実習演習」（ $n=47$ ）で比較した。

方法としては、各講義中に用紙（図1）を配布し、

手順1 学生は3つの領域（知識、技能及び態度。）（表1）のそれぞれについて5項目を選び、もっとも大切と思う項目から順に、5点、4点、3点、2点、1点を得点として書

○

出席番号	学習番号（左詰付、黒字で記入）	氏名

「教育実習生に求められる資質能力」についてのあなたの意見

作業1 知識、技能及び態度について、それぞれの領域について5項目（計15項目）を選び、もっとも大得意と思う項目から順に、5点、4点、3点、2点、1点を得点として与えなさい。

以下の10項目から1つ選び、大得意と思う順に5点、4点、3点、2点、1点を付ける。				
領域	項目	得点	グループの得点	順位
知識	教科の専門知識			
	教科の意義			
	教科の教育法			
	教科の教育内容			
	教材研究・分析			
技術	指導案の作成			
	板書のしかた			
	発問のしかた			
	注意のしかた			
	指示のしかた			
態度	責任感			
	健康			
	声の大きさ			
	広い視野			
	実践・行動力			

作業2 グループ内で、各項目ごとに得点を集計し、グループとしての領域内順位を算出して書き込む。さらに、下の表にグループ順位を書き込む。

「教育実習生に求められる資質能力」についてのアンケート調査結果
1993年京都府立大学教育実践研究センター（出版：山川図書1997、自由学習方式による教育実践基礎訓練プログラムの開発と試行、日本教育工学会誌、Vol.11 No.2、3、45-56。）
回答者365名（大学教員35、付随学級教員60、指導実事30、小学校教員58、中学校教員66、実習終了生66名）

領域	項目	グループの順位	順位	グループの順位	順位	グループの順位
知識	1 教科の専門知識		板書のしかた		けじめ、態度	
	2 教科の意義		発問のしかた		端正な服装・容姿	
	3 教科の教育法		教科の話し方		積極的意欲	
	4 教科の教育内容		指導案の作成		マナー、エチケット	
	5 教材研究・分析		注意のしかた		責任感	
技術	6 指導案の作成		指示のしかた		健康	
	7 板書のしかた		教材提示の方法		声の大きさ	
	8 発問のしかた		生徒質問への対応		探求心	
	9 注意のしかた		課題の与え方		体力	
	10 指示のしかた		授業中のしつけ		広い視野	

作業3 「実習指導教員ならびに経験者の調査結果の順位」と「グループの順位」と比較して、差の大きい項目を3項目（計3つ）選び、その理由などについてグループで話し合いなさい。

作業4 差員のもっとも大きかった項目3つについて、作業3におけるグループでの話し合いもふまえて、あなたが考える差員の大きい理由や気づいた点などを書きなさい。

領域	項目	その理由や気づいた点など、あなたの意見
知識		
技術		
態度		

図1 調査用紙

表1 教育実習生に求められる資質・能力の項目

領域	項目
知識	教科の専門知識、実習の意義、実習の心構え、教材研究・分析、教師の職務・義務、指導案の作成、人権教育、教科の教育法、指導要領、教科教育内容
技術	板書のしかた、発問のしかた、教師の話し方、指導案の作成、注意のしかた、指示のしかた、教材提示の方法、生徒質問への対応、課題の与え方
態度	けじめ・態度、端正な服装・容姿、積極的意欲、マナーやエチケット、責任感、健康、声の大きさ、探求心、体力、広い視野、実践・行動力

き込む。

手順2 学生のグループ内で、各項目ごとに得点を集計し、グループとしての領域内順位を算出する。

手順3 その結果と先行研究「実習指導教員ならびに経験者の調査結果の順位」を比較して、各領域で差の大きい項目を選び、その理由についてグループで話し合う、という活動を授業として実施している。

このうち、手順1の得点を各項目について集計して、重みづけなしのデータのカイニ乗検定を行った。有意な項目となっているのは6項目で実習後の学生の得点がより高いのは、

「教師の職務・責務」(領域「知識」)

「健康」(領域「態度」)

「体力」(領域「態度」)

の3項目。実習後学生で低くなっているのは、

「指導案の作成」(領域「知識」)

「指導案の作成」(領域「技能」)

「指導性」(領域「態度」)

の3項目であった。

続いて、学生が重要とみなしている項目について着目し、その得点平均の高い項目を並べると、実習前学生は、

- ① 教師の話し方 (領域「技能」) 87.6%
- ② 発問のしかた (領域「技能」) 75.2%
- ③ 指導案の作成 (領域「知識」) 74.3%
- ④ 板書のしかた (領域「技能」) 73.3%
- ⑤ 責任感 (領域「態度」) 67.6%

であり、実習後の学生は、

- ① 教師の話し方 (領域「技能」) 87.2%
- ② 発問のしかた (領域「技能」) 83.0%
- ③ 教科の専門知識 (領域「知識」) 80.9%
- ④ 板書のしかた (領域「技能」) 78.7%
- ⑤ 教材研究・分析 (領域「知識」) 76.6%

となっている。実習前と実習後では、「指導案の作成」が「教科の専門知識」にかわった以外は同じ項目であった。ここから、本学学生にとって実習前に懸念する要素と、実習後に重要だったと考える要素はほぼ同じであり、「教師の話し方」「発問のしかた」「板書のしかた」といった「伝えるための技能」を本学の実習前学生に提供することが重要だといえる。

3. マイクロティーチングの試行

「教育臨床GP」の中でマイクロティーチングの科目開発を行った。学部学生向けの試行授業(正規外)として「学習指導特論」(2年目は名称を「授業技術演習」に変更)を次のように1週に2コマ連続(90分×2コマ)で実施した。

マイクロティーチングの方法と効果については、坂元ら(1977)、高橋ら(1987)など先行研究で課題と展望が述べられている。本試行では、マイクロティーチングを次のように実施した。

・チーム構成：4～5名。教科、学年混在。

教師役、生徒役に分かれる。

・演習セット

- ① 8～15分間の授業(授業の開始部分)
- ② 評価シート(自己、観察者)の記入

表2 「教育臨床GP」で実施したマイクロティーチングの講義日程

第1週（2コマ）	講義「授業技術」とマイクロティーチングの説明と班分け
第2週（2コマ）	中学校現職教諭「英語」による模擬授業とその解説 
第3週（2コマ）	中学校現職教諭「数学」による模擬授業とその解説
第4週（2コマ）	演習「マイクロティーチングの練習」（ビデオ機器操作練習含む）
第5～7週	演習「マイクロティーチング」
第8週	演習「マイクロティーチング」と総括

模擬授業風景

(a)マイクロティーチング演習の自己・他者評価

第4回配布資料「マイクロティーチングの効果測定用紙」授業者用、観衆者用より

授業教科： 国語 単元等： 伝わりやすい話し方

○5段階評価

	評価者	初回	2回目
1. 声の聞き取りやすさ	自己	5.00	5.00
	他者	4.75	4.50
2. 話す速さの丁寧さ	自己	5.00	4.00
	他者	4.50	4.33
3. 言葉使いのやさしさ	自己	4.00	4.00
	他者	4.00	4.33
4. 黒板の字の見やすさ	自己	2.00	2.00
	他者	3.54	4.33
5. 板書の内容の適切さ	自己	3.00	3.00
	他者	3.86	3.92
6. 生徒を見ている	自己	5.00	4.00
	他者	4.44	4.42
7. 意図の明確さ	自己	2.00	5.00
	他者	3.79	4.25
8. 板書・疑問・指名等のタイミングの良さ	自己	3.00	4.00
	他者	4.17	4.17
9. ていねいさ	自己	3.00	3.00
	他者	4.21	4.33
10. やる気が出る	自己	3.00	3.00
	他者	3.86	4.17
11. 落ち着いた雰囲気	自己	4.00	3.00
	他者	3.93	4.25
12. 計画性	自己	4.00	4.00
	他者	4.21	4.17
13. わかりやすさ	自己	4.00	4.00
	他者	4.57	4.67

○授業者自身の感想と、観衆者との相互評価作業から見出した具体的な改善箇所とその方法

初回	2回目
・導入でのムダが多い。 ・ムダな疑問が多い。 ・そのたびに区切って読ませるべき。	・やはり絵や写真がないとキツイのかと思った。 ・初回より多くのことを教えようとした分、途中で頭がこんがらがってしまった。考えすぎてかたくなってしまったので悔しいが癒える。

図2 評価比較表



図3 DVD-Videoのメニュー画面

③15～20分間の批評（ビデオ視聴含む）

- ・期間内に各自2セット実施する。

科目終了後、マイクロ・ティーチングの評価値の比較表と、授業映像のDVD-Videoを受講者にフィードバック資料として配布した。

受講後のアンケート調査からチーム構成、手順・操作のわかりやすさについて妥当という評価が得られたので、2007年度から学部教職課程の正規科目として、「授業技術演習」を2クラス開講した。その2クラスは、取得予定教科を問わないクラスと教科「国語」に特化したクラスである。教科「国語」に特化したクラスは、文部科学省の「平成18年度資質の高い教員養成推進プログラム」に選定された本学の「言葉の力を創生する教員養成プログラム」で開発されたものである。本報告では、取得予定教科を問わないクラスのみを対象としている。

4. 教職大学院でのマイクロ・ティーチングの導入

本学では、教職研究科（教職大学院）を2008年度に開設した。教職大学院の設置において、専門職大学院設置基準および文部科学省告示により定められた領域に関する科目があり、本学では、共通科目群として10科目を設置した（表3）。

表3 早稲田大学大学院教職研究科 共通科目群（2009年度）

領 域	科 目 名
教育課程の編成及び実施に関する領域	カリキュラム開発の理論と実践
	カリキュラム・マネジメントの理論と実践
教科等の実践的な指導方法に関する領域	授業設計と授業分析の実践力
	授業技術の理論と実践 ※
生徒指導及び教育相談に関する領域	学校カウンセリングの理論と技術
	児童生徒の社会性・規範意識を育てる開発研究
学級経営及び学校経営に関する領域	学級経営の理論・実践研究
	学校組織開発の理論と実践
学校教育と教員の在り方に関する領域	教員の社会的役割と職業倫理
	学校とコミュニティ開発 ※

※選択必修

このうち、教科等の実践的な指導方法に関する領域の科目「授業設計と授業分析の実践力」で、マイクロ・ティーチングを取り入れている。

本報告では、マイクロ・ティーチングにおける教師役学生の自己評価の傾向について、教職大学院生（院生と略）と学部教職課程の学生（学部生と略）を比較して特徴を抽出し、マイクロ・ティーチングの方法について改善点を検討したい。

表4 教職大学院「授業設計と授業分析の実践力」の講義日程

第1週（2コマ）	講義「授業技術」、「単元計画」とマイクロティーチングの説明
第2～3週	演習「単元設計」
第4～7週	演習「マイクロティーチング」
第8週	演習「マイクロティーチング」と総括

表5 自己評価の得点比較

項目 マイクロレッスンの回 n	院生（教職研究科）			学部生（教職課程）		
	初回	2回	t 検定	初回	2回	t 検定
①声の聞き取り易さ	4.14	4.24	n.s.	3.07	4.13	***
②話す速さ	3.10	3.71	***	2.53	3.47	***
③言葉使いのやさしさ	2.9	3.67	***	2.73	3.73	*
④黒板の字の見やすさ	2.71	3.52	*	3.07	3.67	n.s.
⑤板書内容が適切	2.86	3.71	***	2.87	3.14	n.s.
⑥生徒観察	3.24	3.90	*	3.13	3.80	n.s.
⑦意図の明瞭さ	2.95	3.71	*	2.87	3.33	n.s.
⑧板書・発問・指名等のタイミング	2.95	3.52	n.s.	2.67	3.07	n.s.
⑨ていねいさ	2.67	3.48	*	2.40	3.33	*
⑩わかりやすさ	2.95	3.48	n.s.	2.40	3.40	***
⑪やる気	2.90	3.43	n.s.	2.67	3.53	*
⑫落ち着き	2.71	3.38	***	2.87	3.53	n.s.
⑬計画性	3.24	3.86	n.s.	2.67	3.53	*

*…p<0.05 ***…p<0.01

ン初回と2回目の自己評価の得点は大きな違いがあった。院生は初回と2回目の間で8項目（②話す速さ、③言葉使いのやさしさ、④黒板の字の見やすさ、⑤板書内容が適切、⑥生徒観察、⑦意図の明瞭さ、⑨ていねいさ、⑫落ち着き）で有意な差が出ている。一方、学部生は7項目（①声、②話す速さ、③言葉使い、⑨ていねいさ、⑩わかりやすさ、⑪やる気、⑬計画性）で有意な差がでた。院生、学部生ともに、初回と2回目で有意差のある項目は②話す速さ、③言葉使いのやさしさ、⑨ていねいさの3項目であった。

6. マイクロ・ティーチング事後の評価

科目終了時、受講生は、マイクロ・ティーチング全体を振り返り、板書の技術、発問の技術、話し方の技術、生徒把握の技術、教材観や教材理解、教科の理解の5項目について、自身にとっての必要度、マイクロ・ティーチング事前と事後の自信の程度を4段階で自己評価した（表6）。必要度の認識は、院生と学部生の間では大差ない。しかし事前、事後の自信の程度については、

表6 必要度と自信の程度

	院生（教職研究科）			学部生（教職課程）		
	必要度	自信		必要度	自信	
		事前	事後		事前	事後
板書の技術	3.45	1.97	2.80	3.69	2.22	2.93
発問の技術	3.82	2.09	2.88	3.72	2.28	3.00
話し方の技術	3.64	2.27	2.83	3.56	2.50	3.03
生徒把握の技術	3.55	2.50	2.86	3.66	2.21	3.04
教材観や教材理解	3.70	2.47	2.93	3.69	2.66	3.17
教科の理解	3.61	2.38	2.95	3.75	2.75	2.78

院生の方が概して低かった。

このマイクロ・ティーチングの自己評価・観察者評価について、Waseda-netのCourseN@viで提供するExcelファイルに、自己評価、観察者評価を学生自身が入力することとし、担当教員が処理して以下の総括票を各自にフィードバックした(図5)。

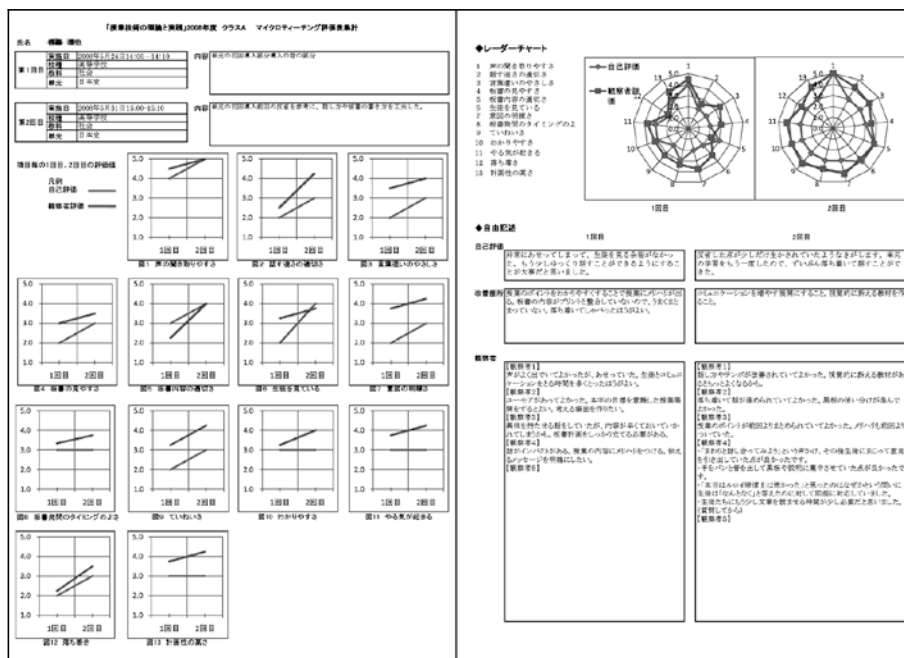


図5 マイクロティーチングの総括票の例

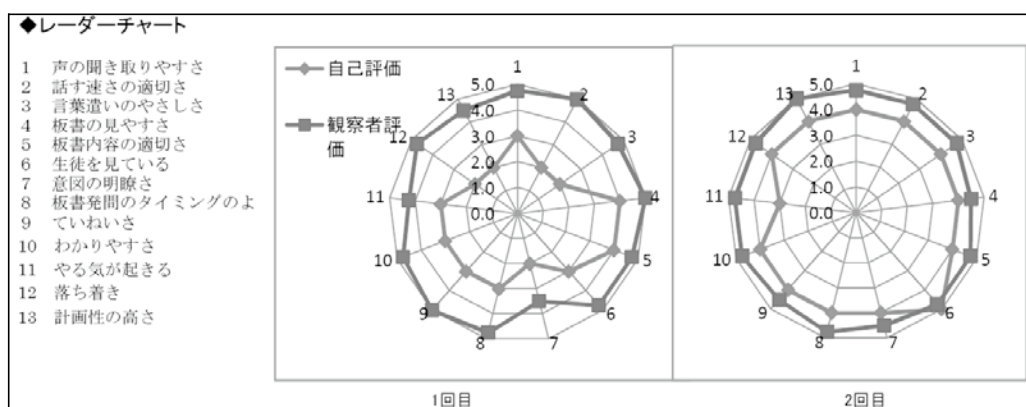


図6 レーザーチャートによる初回と2回目の比較例

受け取った受講者からは、「特にレーダーチャートは自分の課題とするところが、全体の中から数値的に見つけやすく、とても分かりすくてよい」（2年制コース1年生）、「メンバーの「目利き力」（授業観察力の意）も一目瞭然になっていたようで興味深かった」（1年制コース）という意見が多く比較的肯定的であった。今後、その効果は検証していく。

7. おわりに

教職大学院生のマイクロ・ティーチングにおける自己評価の傾向が学部教職課程と異なることから、マイクロ・レッスンの自己・観察者評価の項目の精選と、さらに観察者としての評価の傾向についての検討が次の課題である。

また、学部教職課程と教職研究科で実施しているマイクロ・ティーチングの映像記録で許可の得られたものを携帯用AV再生機器でいつでも反復して見られるようにして、受講者自身だけでなく他のチームや教職課程履修者の資料となるようなシステム（図7）を開発中である。

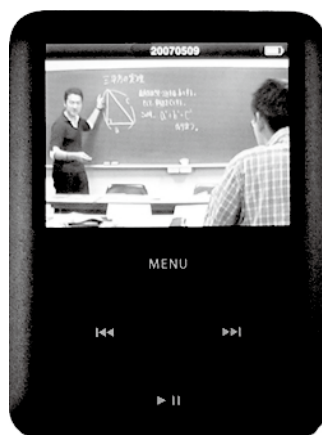


図7 iPod（Apple社製）によるマイクロ・ティーチング映像の活用

本研究の一部は、早稲田大学教育総合研究所研究部会「現代的教育課題に対応する教師力とその育成に関する基礎的研究」（2007-2008年度、研究代表：三尾忠男）の支援を受けている。

引用・参考文献

- 坂元 昂ほか（1977）簡易型マイクロティーチングにおけるフィードバックおよび評価作業の効果，日本教育工学雑誌，Vol. 2, No.3, 81-93.
- 山川信晃（1987）自己学習方式による教育実践基礎訓練プログラムの開発と試行，日本教育工学雑誌，Vol. 11, No.2・3, 45-56.
- 高橋哲郎ほか（1987）教育実習事前学習プログラムの開発とマイクロティーチングの改善に関する研究，同上，57-70.
- 三尾忠男ほか（2008）私立総合大学教員養成課程におけるマイクロティーチングの導入，JSET第24回大会講演論文集，243-244.

The Introduction of Micro-teaching into Teacher Training Courses at Waseda University

MIO Tadao, MAKINO Tomokazu

The Japanese Ministry of Education and Sciences is currently conducting new promoting programs in teacher training divisions at universities and graduate schools in order to solve various problems emergent in today's primary and secondary education schools. For example, 'Teaching Practice Course'(Tentative Name) is about to be introduced to improve and guarantee teachers' quality.

As one of these Ministry of Education and Sciences programs, we have experimented with micro-teaching at undergraduate level from 2005 onward, and at the Professional Graduate School for Teachers, established in 2008. At first this paper reports the purposes and process of this experiment in the non-compulsory teacher training curricula at Waseda University, a large-sized private university, and then compares and analyzes the difference between undergraduate students' self-evaluations and graduate students' ones in this micro-teaching experiment.